

# 古河文化見聞録

## 社会派ミステリーの鬼才・小林久三

### 突然の訃報

平成18年9月、1本の電話にわが耳を疑いました。「小林先生が亡くなった……」。

心筋梗塞と2度の脳梗塞を乗り越え、半年ほど前にお目にかかった折にも「徐々に体力も戻ってきた。今年は執筆を再開できそうだ」とおっしゃっていたのに……。

あれから10年。今回は古河出身の推理作家・小林久三を紹介します。

### 映画監督を夢みて

小林久三は昭和10年、古河町に生まれました。古河一高から東北大学へ進み、映画監督になることを夢みて、松竹大船撮影所に助監督として入社します。入社後最初の仕事は木下恵介監督「あの波の果てまで 第二部」の助監督見習いでした。

その後、助監督室発行のシナリオ集に発表した作品が認められ、数々の脚本を手がけるようになります。その筆力たるや、他の脚本

家に頼んでいたシナリオがクランクインに間に合わず、急遽、依頼を受けた小林は、一晩で仕上げたという伝説も残っているほど。

当時の松竹では、監督には脚本力が必須という不文律があり、小林の筆力は当然、監督昇格が叶ってもおかしくないものでした。

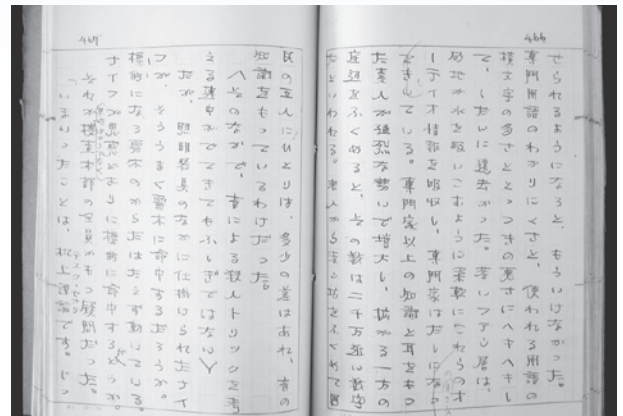
しかしながら、逆に、豪筆ともいえる量産ぶりが仇となり、間に合わせの仕事させられることが多く、小林の脚本への評価は必ずしも芳しいものではありませんでした。時間をかけることが許されないばかりか、手がけた脚本の大部分が喜劇であったことも、不幸といえるかもしれません。後の作風から想像するに、サスペンスなどの脚本だったならば、もっと高く評価されていたはずです。

### 映画人から推理作家へ

小林の入社当時、すでに斜陽化しつつあった映画界にあって、まもなく、会社の合理化により小林はプロデューサーへの転属を余儀なくされます。監督昇格の夢は完全に潰え去



▲宮崎ロケにて出演者・スタッフと。左から3人目が小林。右隣は俳優の加藤嘉



▲冬木鋭介名義の自筆原稿「暗黒映画祭」。後の『黒衣の映画祭』の原型と思われる